

2015年12月10日、大阪府茨木市・摂津市を流れる大正川中流において業者の遺棄と思われる多数のニホンイシガメが見つかった。遺棄個体回収・保護のためその後も頻繁に搜索を続けた結果、ニホンイシガメの他にミナミイシガメも見つかった。

大正川での調査は2004年から続けており、元々生息しているニホンイシガメについては、ほぼナンバリングが完了している。もちろん周辺の河川などから新しい個体が供給されることも考えられないわけではないが、それはごく稀である。したがってノーマークのニホンイシガメは今回捨てられた個体と判断できる。つまり産地が分からない国内外来種である。それらは2017年3月までに163個体捕獲された。また大正川に生息していないミナミイシガメは合計36個体が捕獲された。

#### ●発見されたニホンイシガメについて

発見されたニホンイシガメはオス46個体(28%)、メス117個体(72%)であった。サイズ別にみると、背甲長100mm～120mmと160mm～180mmの個体が多かった。100mm～120mmサイズは飼育初心者が手を出しやすいサイズであり、160mm～180mmはほぼメスで、マニアが繁殖目的に購入しがちなサイズであろう。また環境省の規制を逃れた80mm未満のサイズの個体は全く見つからなかった。

発見された個体の中には別の地域で個体識別されたものもあり、それらは知多半島の個体であることがわかった。また捕獲される前からのものと思われる四肢欠損や大きな傷がある個体も混じっていた。さらに業者の管理中に負ったと思われる皮膚や甲羅の傷や炎症はほとんどの個体で見られた。通常の飼育状況では考えられないほど重症になっているものも少なくなかった。

#### ●保護したニホンイシガメのその後

12月10日に発見した116個体のうち生きていたものは111個体、そのうち12月24日までに27個体が死亡した。生存していた84個体のうち、知多半島の個体など一部の個体を除いて76個体を姫路市立水族館に引き取っていただいた。その後適切な管理が行われたが、水カビや炎症など通常では致命的ではない原因で、また原因もわからないまま死んでいく個体が多数出て、3か月もしないうちに生存数は3分の1にまで減った。

12月10日以降に捕獲されたニホンイシガメについては、京都府保健環境研究所や和亀保護の会の会員宅で飼育し回復を試みたが、やはり多くの個体が死亡した。加温することによってエサを食べ始め、回復するかに見えた個体も、炎症を発症して四肢が腫れ、エサがとれなくなって衰弱し、死亡した。硫酸プロプトマイシンなどいくつかの抗生物質の注射(京都府保健環境研究所、多田氏提供)を試した。効果のあるものがなかなか見つからなかったが、エンロフロキサシンによって治癒した個体が出た。

背甲長別で保護後の生死を比較すると、雌雄に関係なく130mm～140mmの個体で7割以上の個体が生き残り、170mm～180mmの個体で生き残っているものは1割に満たなかった。カメたちは業者の杜撰な管理のもと、等しく劣悪な飼育環境に置かれていたと思われるが、130mm～140mmというサイズは、ある程度体力もある上に、ケースなどに詰め込まれた際に、隙間の空間にすっぽり入り込めたのだろう。そのため傷を受けることが比較的少なく済んだのだと思われる。一方170mm～180mmでは相互に強い力で爪を打ち込み合うことになって怪我も多く、炎症が起こり安くなって結果的に死亡率が高くなったのだと考えられる。また、カメの肥満率(瘦肥)によって生死の差は見られなかった。

発見した 163 個体のニホンイシガメのうち、2017 年 3 月 1 日時点で生存しているものは 54 個体（うちオス 23 個体、メス 31 個体）、生存率は全体で 33%（オス 50%、メス 26%）であった。生き残ったものは、姫路市立水族館や群馬県立自然史博物館で展示・啓発事業に貢献したり、譲渡先の個人宅でペットとして飼育されたりしている。

●発見されたミナミイシガメについて

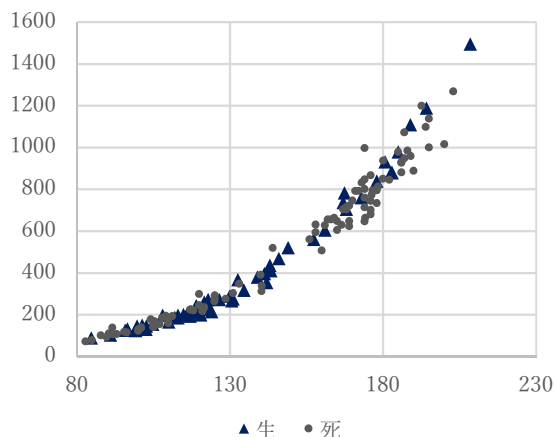
発見されたミナミイシガメはオス 12 個体（33%）、メス 23 個体（64%）、不明 1 個体（3%）であった。不明個体は発見時に既に死んでいたもので、水中で背甲のみ発見され雌雄の判断がつかなかった。サイズ別にみると、背甲長 130mm～140mm、140mm～150mmの個体が同数で多かった。

発見されたカメの多くに、野外にいた際に負ったと思われる四肢や尾の欠損、甲羅の傷などが見られた。いわゆる B 級品として扱われ、安値で売られる個体であった。また、栄養不足が原因と考えられるハーダー氏腺病を発症していたミナミイシガメも 25%にのぼったが、業者の管理下で負ったと思われる傷は少なかった。これは爪がニホンイシガメほど鋭くないこと、サイズが相互に似通っており、力の差が少なかったこと、甲羅の質（細かい傷がつきにくい）が原因だと考えられる。

●保護したミナミイシガメのその後

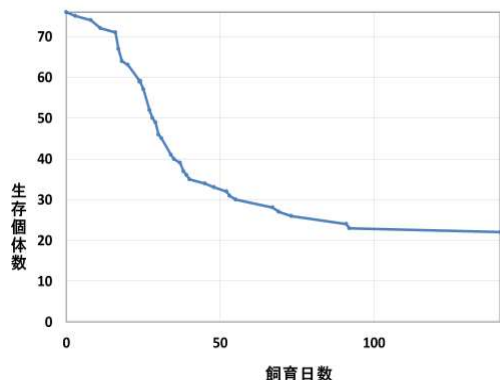
大正川でミナミイシガメを発見した際、明らかに衰弱していると感じた個体は 1 週間以内に死亡したが、それ以外は加温環境でエサを摂り、順調に回復した。死を免れた個体は、譲渡先の個人宅でペットとして飼育されたり、繁殖に貢献したりしている。

遺棄イシガメの瘦肥と生死の分布



今回遺棄が明らかになり遺棄個体が回収できたのも、捨てられたのが調査地だったからである。このような遺棄は倫理観のない業者によって、日本のあちこちでなされている可能性がある。その結果知らないうちに遺伝子攪乱が起こったり、病気感染によるニホンイシガメの地域個体群が絶滅したりしていることも考えられる。一方野外のニホンイシガメは未だ次々と捕獲されている。この状況を我々はどう考えるのか。「我々は真面目にやっているから関係ない」と見て見ぬ振りをするのか。鼎の軽重が問われるところである。

飼育日数と生存数



背甲長別生死の割合

